

期待される教師像と期待される保育者像 その2

五十嵐 敦 子¹

A Study of the Image of Respectworthy Teachers and Respectworthy Pre-school Teachers (2)

Atsuko Igarashi

はじめに

前論文「期待される教師像と期待される保育者像 その1」(『白鷗大学教育学部論集第6巻第1号』2012年4月掲載)において、筆者は、主に期待される教師像について言及した。本論文においては、期待される保育者像、つまり保育者の資質能力について、論じたい。

第1章においては、玉川大学教育学部教授と教育学部附属幼稚園園長を長らく勤め、保育界に大きな影響を与えた日名子太郎が提案した保育者に望まれる資質について述べる。第2章においては、イタリアの幼児教育者で感覚教育や日常生活訓練を中心としたモンテッソーリ教具を開発したマリア・モンテッソーリの教師(保育者)像について述べたい。第3章においては、3人の現職保育者へのインタビューを通して、保育者として長いキャリアを歩んで来られた保育者自身が考えた保育者像に迫りたい。

なお、本論文においては、教育と保育、教師と保育者をほぼ同義語として使用している。

¹ 白鷗大学教育学部

第1章 日名子太郎の保育者論

日名子太郎は、「保育学」という新しい学問の体系化の確立のために大きく貢献し、長く玉川大学教育学部において保育者養成に関わってきた。したがって、「保育」関係の著作も多数出版している。玉川大学を退職後は、平成2年開校の聖徳大学で教鞭を取り、さらに最後の仕事として、香港日本語幼稚園園長を勤めた。

私事ではあるが、筆者の大学在学中に、玉川大学在職中の日名子先生が非常勤で「保育内容（人間関係）」を担当されていて、直接指導を受けた。お洒落で清潔感があり、美的なセンスがあり、ユーモアもあって魅力的な先生であった。その時、授業の中でご自分の経歴や海外の幼児教育について話をされたが、特に経歴がユニークで印象的であったことを記憶している。先生の父上が彫刻家であること、ご自身は、工学部の出身であったが、池袋で幼稚園を開園すると同時に、園長を勤めながら、立教大学大学院で心理学を学んだ経験について話された。また、先生のご紹介で玉川大学教育学部附属幼稚園に見学に行かせて頂いた。当時は珍しかった男性教諭がギターを弾きながら、子どもたちとエネルギッシュに園庭を駆け回っていたことが筆者にとってはショッキングな光景であった。「幼稚園の先生は、男性でもできるのだ。男性でも全く問題ないのだ。」と感じた。

日名子の弟子でもある谷田貝公昭は、共著『新保育学概論』（同文書院、昭和58）において、保育者に望まれる資質については、日名子の理論を紹介している。そこでは、七項目¹を挙げているが、本論文においては特に以下の五項目に注目することにする。

- ① 保育者は、雰囲気大切である。
- ② 保育者は、保育哲学をもつべきである。
- ③ 保育者は、教えることより遊ぶことのできる人である。
- ④ 保育者は、ユーモア感覚のあること。

⑤ 保育者は、よろこびの人であること。

第一に挙げている「保育者の雰囲気」とはどういうことを意味するかについて、述べる。モンテッソーリは、教師としての内面的な心構えは当然のことであるが、外見的な点についても気を遣うべきであるとしていることを、平野智美は論文「モンテッソーリの教師論」(『モンテッソーリ教育』第3号、1970年掲載)¹¹において指摘している。

保育者は、清潔であること、物静かで優雅な振る舞いができること、色彩感覚があつてセンスがあること、品格のある行動ができることなどが必要であるとモンテッソーリは考えたと指摘している。

保育者は、当然子どもにとって「憧れの人」でなければならないのである。モンテッソーリ教育法の特徴の一つに、「整えられた環境」を上げることができる。子どもが毎日過ごす幼稚園や保育所の環境を明るく、清潔で魅力溢れる教育環境にするために保育者は努力を惜しんではならない。保育者の仕事の一番基本的な部分でもある。環境を物理的環境のみならず、人的環境も意味すると捉えるならば、保育者は、環境の一部となり、彼または彼女自身が憧れる存在でなければならないし、そういう存在になるように常に意識して自分を向上させていかなければならないのである。

第二に挙げている「保育哲学を持つ」ことは、一番重要なことである。保育者が自分はこの教育をしたい、あるいはこのような子どもに育てたいという教育観を持たずに教育をすることは不可能である。教育に対する自分の考えや信念をしっかりと持つことが、一貫性のある教育実践に結びつくのである。このことが、教育者としての使命感や教育に対する情熱、教育的愛情が生まれてくる源にもなる。さらに教育に対する情熱や使命感、責任感が、上記の第五項目に挙げられている「保育者は、よろこびの人である」という内容と一致することになる。

東京女子師範学校附属幼稚園の園長を長く勤め、日本保育学会を創立した倉橋惣三は、『幼稚園雑草』(倉橋惣三選集)の「幼児の教育者」におい

て、保母の苦労は大変なものである、と同時に苦労を忘れてしまうほどに報われる仕事が保育の仕事でもある、と述べている。また、保母の仕事は、自分の仕事に手答えを得ることがなかなか困難であるという。毎日毎日子どもと遊ぶという地道な仕事であるが、その地道な苦労が「結果」となって現れた時に、保育者の歓喜に変わるというのである。教育の成果や結果が出てくるのは、子どもが成長した十年後、二十年後になるという先の長いことになる。そういうわけで、幼かった子どもが成人して、立派な社会人となって教師の前に現れることになれば、それが望外の喜びとなるのである。ⁱⁱⁱ

第三に挙げた「遊ぶことのできる人」は、保育実践力つまり技術を持っていることを含んでいる。教えるというよりもむしろ、遊びを一緒に楽しめる人、子どもと一緒にいろいろなことに感動できる感性豊かな人、そういう人が、第四項目に挙げた「ユーモア感覚のある」人と一致することになる。

「ユーモア感覚のある」保育者になることの重要性は、全国に先駆けて2008年より認定こども園「こどものもり」（埼玉県松伏町）をスタートさせ、また「子ども・子育て新システム」を検討するワーキンググループにも参加された若森正城園長も、同様に指摘している。これから保育者を目指す人に対して、若森園長は、次のことを期待している。

第一に、ピアノが出来るという技術的なことよりも、「私はこういう保育をしたい」という保育への思いや保育に対する真摯な気持ちを大切にしてほしいと述べている。第二に、保育者は常にプラス思考で、子どもの行動や思いを受け止めてほしいという。保育の場面におけるいろいろな出来事を「ユーモア感覚で」「プラス思考で」肯定的に解釈することによって、保育の仕事で大変なことがあっても仕事に前向きに取り組めるようになるというのである。^{iv}

つまり、苦労を伴う保育・教育の仕事を担う保育者は、苦労した結果故に得るものが大きく、深い感動を味わうことになり、前述した倉橋惣三の

言う「よろこびの人」となるのである。

第2章 モンテッソーリの教師(保育者)像

モンテッソーリ教育法の場合、モンテッソーリ教具が教育の中心的な役割を担っているが、教具を使うのは子どもであり、教師のための援助手段でもないことをモンテッソーリは強調している。教具はそこにあるだけで、「教師が教えない」^vと述べている。教師の仕事は、教具を子どもに正確に提示することである。そのためには、教具の目的や使い方を熟知していなくてはいけないという。さらに、子どもの発達段階に合わせて、子どもの欲求に合わせて、その子どもに的確な教具を選んで与えなくてはならないという。子どもが興味を持つような方法で教具を提示する必要があるとしている。

さらに、モンテッソーリ教育法における教師の仕事において、子どもの発達にとってやりすぎは有害となると指摘している。「教師が最大の障害物になる可能性があるから」^{vi}とモンテッソーリは考えた。したがって、ルソーの場合と同様に「消極的教師」とも形容される。しかしながら、消極的な立場をとることが、放任ということではない。モンテッソーリ教育の目的は、子どもの自己教育を指導することであるから、「教師はほとんど教えずにひたすら観察します」ということである。結果として、良い教師になるためには、「観察することと、冷静で忍耐強くて謙遜になること」^{vii}を学ばなくてはならない、とモンテッソーリは述べている。

同時に徳性を身に着けることによって、教師になるための準備をすることになる。その徳性の内容は、「鋭敏な道德性、つまり、冷静さ、忍耐、慈悲深さ、謙遜など」^{viii}であるとしている。保育者は、善悪の判断をするための道德性や倫理性を身に付けている必要があるし、また、子どもの成長を見守る、成長・発達を待つ忍耐力と教師である自分の思い込みを避ける、他人の意見に耳を傾ける謙虚さは、特に必要不可欠な資質能力であると考

える。加えて、自分の視野の狭さや「とらわれ」（先入観を持ってみる）から抜け出すためには、自分の実践した教育を振り返るという反省して改善する点を明確にして次のステップへの繋げていく、省察やカンファレンス（他人の眼）が不可欠になる。^{ix}

モンテッソーリは、教育において子どもの自発的活動が保障することが重要だと考えた。そのためには、次のような教師としての姿勢が必要であると述べている。

「教師は忍耐強く子どもたちに期待しつつ、沈黙を守り、受動的な態度を取りつづけなければなりません。子どもたちの精神が自由に羽を広げる空間を持てるようにと、自分の個性を無にするために身を引いていなければなりません」^x

最終的に、子どもに本来内在しているのではない規律を、教師の力で、教育の力で目覚めさせなくては、あるいは引き出さなくてはならないのである。その規律が生まれるのは、教具への集中によるものであるとモンテッソーリはこう述べている。「規律という道にそって子どもたちを導くのが、私たちの仕事です」^{xi}と。

第3章 保育者へのインタビュー

(1) 最高齢の現役保育者、大川繁子の生き方

保育士、大川繁子の存在を知るきっかけとなったのは、平成24年5月に開催された日本保育学会でのシンポジウム（東京家政大学で開催）であった。大川は、シンポジウムでの発表者で、筆者は参加者の一人であった。80歳代にはとても見えないくらい若く、さらに凛とした姿とハキハキとしたその語り口は、印象的であった。また、大川の「小俣幼児生活団」は、所在地が筆者の勤務先である栃木県ということでさらに驚いたのである。その時にインタビューの依頼をしていたが、翌年平成25年1月に訪問が実現した。以下は、当日大川の話を録音したテープと、当日頂いた資料も参考

にして質問の項目ごとにまとめたものである。なお、文中においては、敬称を省略させて頂いているので、予めお断りしておく。他のお二人の赤羽恵子先生、荒井晶子先生についても同様に敬称を省略させて頂いているので、ご了承をお願いしたい。

1. 保育者になったきっかけ

栃木県足利の名家と言われる大川家に、東京生まれの繁子が嫁いだことが、保育者となったそもそもの発端である。大川家とは、遠い親戚に当たり、その縁で昭和21年に大川邦之氏と結婚した。当時繁子は、キリスト教系の普連土学園女学校を卒業後、東京女子大学数学科に在学中であったが、縁談の話があって、大学を中退して結婚することを本人の意志で選択した。

結婚を決意する時、繁子の実母である松永徐香（しずか）は、娘に、「ものごとは自分で判断し、その結果に責任を持ちなさい」（産経新聞、平成15年1月27日掲載より引用）と言ったという。母のしずかさんは、明治39年生れで27歳で夫と死別してからは、実母（繁子の祖母）が経営していた助産婦・看護婦派遣会社の仕事を手伝いながら子育てもし、また地域貢献活動も行ったという大変な教養人だったようである。「習い事をするなら一流の先生に習え」という母の考えで、三歳の時に、日本における舞踊家の草分けで、日本にリトミックを紹介した石井漠先生の教室に五年間通うことになったそうである。繁子は、三歳の記憶で鮮明ではないが、自宅のある三田から教室のあった自由が丘まで、当時の交通事情を考えると2時間はいったのではないかと。実母からは、「人間としての基礎を作ってもらった」（前掲、産経新聞）と繁子は回想している。

一方、嫁ぎ先の義母、大川波子（本名 ナミ）は、当時の女性としては極めて「跳んでいる女性」だったようである。波子は、五人娘の次女で明治23年生まれ、東京の三輪田女学校に通っていたが、長女が結婚で家を出てしまったことで、急遽家を継ぐことになり、実家に戻るようになる。自由学園を創立した羽仁もと子の教育理念に傾倒し、昭和22年に「小俣女子

生活学校」を開校した。波子が生活学校を設立するのを、強力に支えたのが、羽仁もと子が作った「友の会」のメンバーでもあった和田咲子や従兄弟でクリスチャンの大川英三であり、その他の協力者がいた。戦争のために学業が中途になってしまった若い女子を対象に21人の入学者でスタートした。授業内容は、洋裁、英語、音楽、一般教養、宗教、料理、国語等、実際の生活に役立つ教育内容、正に「生活学校」という名に相応しい学校だったわけである。

この生活学校も2年間に33人の卒業生を送り出して、閉鎖することになり、その後は、昭和24年4月に、波子は同じ教育思想に基づき、「小俣幼児生活団」というネーミングで保育所を開設した。昭和27年春には、社会福祉法人として正式に認可を受けている。羽仁もと子先生の命名である。

波子は園長であったが、資格者が必要ということで、次男真（まこと）さんが誕生した昭和25年に、繁子は子育てをしながら受験勉強をして、県の試験に一度目で合格した。昭和40年頃から、実験保育所になったことを機会に保育現場に入って関わるようになった。

波子が昭和51年に83歳で亡くなったことで、繁子にとっても、「小俣幼児生活団」にとっても大きな転機を迎えることになる。

理事会で、「繁子さんは、このまま主任保母になり、園長には孫の真さんが引き継ぐ」ということが決定した。繁子の次男、真は、工学部でデザインを学んでいる。そのデザイナーとしてのセンスと考えが、現在の園舎の至るところに生かされていると思われる。

現園長は、25歳という若さということもあって、園長に就任した頃は、正直、保育という仕事に余り乗り気ではなかったという。そのうち、自分で保育のことを勉強する中で、偶然にもモンテッソーリ教育に出会い、京都の赤羽恵子先生の元へ通うようになった。現在は、勤務している保育士にも京都へ行かせて学ぶ機会を提供している。モンテッソーリ教育を学び始めて6～7年目に、年齢別保育ではない、自由保育への切り替えを真園長が実現させた。

一般的にいう、「モンテッソーリ教育」という看板、ブランドは全く世間に対して表明はしていない。実際、この保育所では、入園案内もないし、ホームページも作っていない。すべてにおいてアナログ的な考えで一貫している。園舎の保育室の中に入ると、典型的なモンテッソーリ教具がどちらかという控えめに置かれていると筆者には感じられた。しかしながら、保育の底には、モンテッソーリ教育思想が自然な形で流れているように感じられた。不思議である。

2. 保育者人生の中で、一番嬉しかったこと

35、6年前、自閉症の子ども、コウちゃんとの出会いがあり、手探り状態のまま、東京での研修会に出席して、発達障害を持った子どもへの援助について勉強した。最初に参加した時は、「自閉症児は、親の育て方が影響している」という。ところが、翌年の研修会では「自閉症は、親の育て方の影響は全く無い」ということになった。コウちゃんは母音だけしか話せなかった、突然繁子の口の中に自分のスプーンを入れたりしたこともあった。成人式の時再会したコウちゃんは、相変わらず口数は少なかったが仕事に就いている姿を見て、本当に感動したという。

3. 保育者人生の中で、一番苦勞したこと

この質問に対して、今の自分は幸福であるし、「辛かったこと」は、何故か思い出せないという。保育園を經營するにあたり、金銭的な苦勞はしてきたと思うが、それはそれ程重要なことではない。最近モンスター・ペアレントという言葉をよく耳にするが、この園の保護者は、苦情を訴えてこないし、入園時、「できるだけことはやりますので、遠慮なく申し出て下さい」と、保護者に伝えてあるとのことである。産後の日達が悪いお母さんの時は、彼女が回復するまでの期間、自宅まで園長が送り迎えをしたこともあった。

4. 保育者として大切にしていること

ある時、園の見学に来た若い夫婦が帰り際に、繁子に「卒園生がどのようなになっているのか？」と質問した。期待されている回答は、ある程度予想

がついたが、繁子は、自分の判断で次のように答えたという。「バライティに富む卒園児の中には、足利高校の野球部の顧問も、野球部のピッチャーも、さらに応援団長もいます。」と言った。卒園した子どもたちが、有名大学や進学校に進学することよりも、個性を発揮して多方面で活躍していることが嬉しいことであるという。

また、子どもに対しては、常にプラス志向で子どもの行動を理解しようとしている。1歳児になったある子どもが、噛みつくなどの行為をしたことがある。「噛みつく」という行為は、子どもに意志が出てきたと理解する。また、子どもは、今度何をしてくれるのかしらと興味を持つことや子どもの行動を面白いと感じることが大切だという。

栃木県出身の詩人、相田みつおの言葉「名もない草も実をつける。命一杯自分の花を咲かせて」は、大切にしている。

(2) モンテッソーリ教育を初めて日本に紹介した赤羽恵子と深草こどもの家

モンテッソーリ教育を理論的にまたは、実践的に研究する者で、赤羽恵子先生の名前を知らない人はいないであろう。そのくらい日本モンテッソーリ界において、著名な方である。一度お会いしてみたいとずっと思っていたが、今年1月に足利市の大川繁子さんをお訪ねして、「赤羽恵子先生」のお名前が出たことで、一つのきっかけが出来京都の「深草こどもの家」を訪ねることになった。平成25年2月の寒い、雨の日であった。園の玄関からホールに入ると、暖炉があって園児たちは、その安らぎのある暖炉の火に迎えられ、身体を温めてから保育室へと向かう。

赤羽は、現在も現役の保育者である。京都モンテッソーリ教師養成コースの所長でもあり、その附属「深草こどもの家」の創立（1979年）以来の園長でもある。訪問の当日も日課通りの保育がスタートした。午後1時で降園する三歳児の8人は、12時15分にホールに集合した。ここからが赤羽園長の出番となる。お帰りまでの時間は、園長自らが子ども一人ひとりに向き合いながら指導する大切な保育時間となる。音楽が得意な園長は年少

児に好きな歌を一人で唄わせたり、歌いながら言葉遊びができる言語教育を提供するなどしていた。最後は、音がしないように丁寧に椅子を片付けることを誘導していた。

京都市伏見区にある深草こどもの家は、1000坪にも及ぶ自然豊かな竹林に建っている。この敷地の入り口から70段の階段を登らなければ、建物の玄関には到達しないのである。子どもの歩幅を考えて、階段も後もなっ一段ずつ増やしていったそうである。1000坪の土地は現在も借地である。この広大な敷地は粘土質で、風流好きの地主は昔、茶室、さらに陶芸窯まで建てた。当時富山大学教育学部（1973年から6年間）に勤務していたことで、地主から信用して頂いたことが幸運だったと回想している。

1. 保育者になったきっかけ

赤羽園長が保育者になった動機については、「モンテッソーリ教育との出会い」（『モンテッソーリ教育』第44号、2011）に詳細がご自身の手で書かれているので、ここではできる限り簡潔にその経緯を述べたい。

第一に、群馬県前橋の女学校在学中に、日本は「敗戦」（あえて「敗戦」と呼ぶ）を迎えたことである。敗戦を迎えた両親はもちろん、周りの大人たちの絶望に打ちひしがれた様子を見ると、女学生であった自分は、全く将来の夢を持てなっし、それよりも脱力感から生きていく力が沸いて来なかったという。

しかしながら、敗戦後の二学期から、世の中も大きく変わり、同様に女学校のカリキュラムにも大きな変化があった。音楽が好きな恵子は、東京から若い音楽教師が赴任してきたことがとても嬉しかったという。個人的にピアノ奏法など熱心に教えてくれた彼女はカトリック教徒でもあった。その教師と出会いが、一つの方向を導いてくれたといえる。尊敬するその教師が、前橋のカトリック教会でのオルガン伴奏の仕事でピアノの上手な恵子に手伝ってくれないかと頼んだことがきっかけとなって、生まれて初めて全く異なる世界であるキリスト教と神に触れることになる。二年間、

その教会に通った結果、クリスマスに洗礼を受けた。そのことで、何かこれからの生きる見通しがついたように感じたという。

第二に、キリスト教の信者になったことである。洗礼を受けた頃は、修道女を目指していたが、両親特に父親に強く反対され、指導司祭からの薦めもあって、東京で神学の勉強をしながら、幼稚園の先生として働くことになった。大田区にあるカトリック幼稚園で働きながら、資格を取得する為に幼児教育専門学校夜間部に通い四年が経った。その間、赤羽は、当時日本で行われていた行事中心の幼児教育の方法に疑問を感じ、その疑問を神父によく話していた。

第三に、ヨーロッパ留学の機会を得たことである。その批判の聞き役だった神父が、「外国で幼児教育を勉強してみたらどうか？」と、ヨーロッパへの留学を薦めてくれ、奨学金も準備してくれていた。留学先は、オーストリアのウィーンで、皇太子ご成婚で浮き立つ1959年3月末の日本を離れ、横浜港から33日間の船旅でウィーンに向かった。

第四に、留学先がウィーン大司教区立女子専門学校からドイツのモンテッソーリ・コースへと変わったことである。ドイツのケルン幼稚園教員養成学校校長を介して、ドイツのモンテッソーリ運動の中心人物であるヘレーネ・ヘミング (Helene Helming) 女史に出会い、キンダーハウス (こどもの家) を見学したことがきっかけとなった。見学に行って5日目のある日、先生が外出されても、教室に残された子どもたちの様子は先生がいる時と全く変わらず、自分の良心 (秩序感) にしたがって行動し、日課通りの活動を行っていた光景を見て、赤羽は本当に衝撃を受けたと、「モンテッソーリ教育と私」(『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』第5章) の中で述べている、ケルン大学では「新教育の動向」研究もしながら、2年半かけてケルン・モンテッソーリ教師養成コースを卒業した。日本に一度帰ったら、二度と留学は出来ないと思ったので、教育実習は規定の期間の10倍のモンテッソーリ小・中学校での見学実習、教材研究をやったそうである。正に、赤羽恵子は、キリスト教である愛や祈り、聖書との

出会いによって、真実の人間、つまり、本当のその人になっていくのである。

2. 嬉しかったこと

1963年暮れにドイツからモンテッソーリ・ディプロマを取得して帰国した赤羽は、勉強してきたモンテッソーリ教育をどこかで実験（実践）したいと考えていたところ、偶然にも京都の月見が丘という場所で、ドイツ文学者である、鼓常良先生が経営していた保育園を手伝わせてもらうことになった。鼓先生夫妻には、1963年夏ドイツ訪問の折にお会いしているし、顔見知りであった。部屋と食事の提供とその他に月1万円の報酬という条件で雇って頂くことになる。年少、年中児のクラスにのみ「縦割り保育」や自由保育を導入したところ、次第に年長児クラスを担当していた主任の先生にも認めて貰えるようになったことが嬉しかったという。

3. 辛かったこと

子どもの教育のことを第一に考えるのではなく、モンテッソーリ・メソッドやモンテッソーリ教具等が幼児教育産業というビジネスの道具として利用されてしまうことは、とても残念である。

4. 保育者として大切にしていること、または言葉（信条）

幼児教育を志す者は、「子どもと大人は違う」ということを心得るべきであるという。

特に0～3歳までの時期は、記憶にないことが多いし、知らないのであるから、大人は子どもから学ばなければならない。毎年、新しく出会う子どもから新しいものを学ぶわけで、よく子どもを観察することが大切である。このことは、モンテッソーリが繰り返し主張している言葉でもある。さらに、教師は子どもを叱ってはいけないし、子どもの先に行ってはいけないという。つまり、先輩の中学校教師に昔言われたこと、「決して、生徒に勝ってはいけない」（『モンテッソーリ教育』第44号、2011）という言葉の意味を反芻している。

(3) ゆりかご幼稚園（川崎市）園長、荒井晶子先生

1. 保育者になったきっかけ

現在満77歳であるが、園長として毎日ゆりかご幼稚園に出勤する荒井晶子は、副園長である娘、上村瑞枝が立派な後継者として勤務しているが、園にとって荒井園長は大きな存在であることは間違いない。小柄ではあるが、その暖かさといい、華やかさといい、圧倒的な存在感を醸し出している。

荒井は、横浜市立大学で地理学を専攻した。大学の卒業式当日に、川崎市の市議会議員をしていた父健蔵から、「幼稚園を継いで欲しい」（1956年設立、神奈川県公認）と告げられた。荒井の父は、戦後の焼け跡のとうもろこし畑であった現在の幼稚園の土地に幼稚園を建てたいという夢を抱いていた。私財があったわけでも無く、資材が充分にあった時代ではなかった。良い腕の大工を知人から紹介して貰い、その大工の元へ、まだ幼かった娘晶子を伴い幼稚園建設に協力してくれるように、日参したことを記憶しているという。そのくらい、父は幼児教育に希望を見出し、自分の夢を愛娘に託していた、あるいは、娘の才能を信じて娘にその仕事をさせたいという親心からだったかもしれない、と荒井は振り返る。地理学者を志望していて大学院に進学する予定であったが、断念し、急遽心理学を学ぶ為に同大学心理学科に学士入学をした。幼稚園に勤務しながら、大学へ通い、また結婚後は二人の子育てしながら、幼児教育への道を一途に歩んだ。

大学で心理学を勉強する傍ら、園長代理を四年間勤めた後、園長に就任した。大学では、子どもの心理を学ぶ為、当時まだ児童心理学の講座が無かったので、教授と一対一でピアジェの著書を訳しながら勉強をした。一年先輩に夫で現理事長である一郎が在学していたが、彼はラットを使う行動心理学を学んでいた。一郎は、会社員を経て、何故か同じ幼児教育への道を進むことになる。人生は本当に不思議というしかない。ある勉強会で「モンテッソーリ」に出会った。昭和40年頃だったので、いろいろな先生に相談するが、「日本のモンテッソーリ関係者たちには、男性のする仕事では

ない」と言われ、道が閉ざされたかに思われた。しかしながら、ある方の紹介で、アメリカのテキサス州のサンディー・ウエスト先生を頼って渡米した。最初は英語も理解できない状態だったが、通訳者にも恵まれ、ウエスト先生宅に寄宿させて貰いモンテッソーリ教育について本格的に勉強することになった。一郎は、アメリカで、正式なモンテッソーリ教師の資格(SMTC)を取得した。

2. 一番嬉しかったこと

特別に配慮しなければならない子どもS君との出会いである。1対1で関わることを大切にするモンテッソーリ教育を学んだからこそ、出会えたのだと思う。その子は、何故か鋭利なものに特別関心を示す子どもであった。毎日、マッチを付ける、消すことを繰り返す。刃物にも興味を持っていて、包丁でリンゴを切ることも飽きることなく繰り返した。オレンジの皮を切ってジャム作りをしたこともあった。しかし、彼と約束をして、園長先生と一緒にいる時にだけ、道具を使うことになっていたの、朝いつも玄関のところで園長先生が来るのを待っていたそうである。ある時、母親が働いていたS君は、いつもお祖父ちゃんが園に迎えに来ていたが、いつものようにそのことが気に入らない様子で「ぐずぐずしていた」そうである。荒井園長は、教師との信頼関係が出来ていたと判断して、その子を初めて一喝したという。翌日、登園しないのではないかと思ったが、元気で園にやってきたという。卒園後は、疎遠になっていたが、ある時彼の祖父から連絡があり、彼の作品が小学校の展覧会で賞をとり展示されているので、観に来て欲しいとのことであった。立派な作品を目の前にして、彼の大きな成長を思い本当に感動したという。

3. 一番苦労したこと

もちろん、沢山大変だったことはあると思うが、過ぎてしまい、振り返ってみると「大変だった」という記憶は余りないと思う。教えた子どもが短命だった、病気を持っていた子どもが再発してしまったなど、悲しいことはある。しかしながら、「大変なことを解決することが教育である」と思う

という。

4. 保育者として大切にしていること（信条）

子どもに対する愛を通して、子どもの人格を尊重することを常に考えながら、教育を実践している。教材を作る時に、こういう作り方をすると相手（子ども）に失礼にならないかと考えながら実行しているという。（一郎理事長談）「あなたの為にします」と表現することも多いが、教育は、対象である子どものためでもあるが、教育者にとっての満足感でもあり、充足感でもあると考える。子どもにとって心地よく良い環境を提供することによって、子どもが豊かな経験を得て満足する姿を見ることは大人である教師も嬉しいし、満足感を得ることになるという。荒井が、保育者となり50年以上にわたり絵本の読み聞かせを実践し、絵本およそ5千冊を収集してきた結果、幼稚園内の倉庫（3階）のスペースを利用して「絵本図書館」を2011年7月にオープンさせた。「絵本」を大切にしてきたことも、子どもに良い環境を与えたい、豊かな心を育てたいと願い続けてきた結果なのである。

おわりに

本論文のテーマ「期待される保育者像」については、結論を述べることは困難である。

しかしながら、保育者像つまり、保育者としての資質能力についての五項目については、全く納得できるものといえる。また、第3章において紹介した三人の現役の保育者の資質能力について考察する時、この五項目すべてを備えているといえる。

具体的には、保育者としての信念といえる保育哲学、保育者としての使命感、教育的愛情、豊かな感性と人間性、子ども理解を含む保育技術などの資質能力を意味している。

それらの資質能力は、すなわち「あるべき教師像の明示」（2005年10月、

中央教育審議会からの答申）で述べられている優れた教師の三つの条件と一致していることが理解できる。第一に、教職に対する強い情熱、第二に、教育の専門家としての確かな力量、第三に、総合的な人間力の三点を挙げている。

『新しい時代の教職入門』（有斐閣アルマ、2006年）の第一章の著者、秋田喜代美によれば、第三の総合的な人間力の中には、対人関係能力、常識や教養、豊かな人間性や社会性、マナーなど広く含んでいる。

要するに、保育者（教師）としての使命感、実践力、そして人間力の三要素を持っていることが保育（教育）に携わる者として期待されるし、また身につけなければならぬ。

注

- i 日名子太郎編『新保育学概論』同文書院、昭和58年、p.98
- ii 日本モンテッソーリ協会『モンテッソーリ教育』第3号、1970年、p.53～4
- iii 倉橋惣三選集 第二巻 フレーベル館、昭和40年、p.251～255
- iv 汐見稔幸監著『保育学を拓く』萌文社、2012年、p.77～8、p.86
- v モンテッソーリ著、中村勇訳『子どもの発見』日本モンテッソーリ教育総合研究所、2003年 p.184
- vi モンテッソーリ著、中村勇訳『子どもの精神』日本モンテッソーリ教育総合研究所、2004年 p.297
- vii 前掲書、2003年、p.185
- viii 同上、p.184
- ix 日本モンテッソーリ学会主催、第46回全国大会 2013年8月開催 発表要旨集録（シンポジウム提案者、宗和太郎発表要旨）及び林邦雄・谷田貝公昭監修『保育者論』一藝社、2011年、p.116
- x 前掲書、2004年、p.296
- xi 同上、p.296

参考文献

- ・タウン誌「みにむ」平成2年8月号、終戦記念特集
- ・中村悦子「保育文化の研究－栃木の保育・教育に生きる人々に聴く（13）」（季刊『児童文化』第39号、2010春、くさむら社）

五十嵐 敦 子

- 友好学園「深草こどもの家」後援会編『自分で考え、自分を育てるモンテッソーリ教育』
2012年
- 学校法人健正学園 ゆりかご幼稚園入園案内
- タウンニュース（川崎区）2011年7月22日号掲載記事参照